

## 第二章 青いイモムシ

程なくして、その池には他の不思議な動物たちがいます。

アヒルにドードー鳥、オウム、そして赤ちゃんワシです。

アリスが池から出ると、動物たちはアリスの後を追います。

「僕たちみんな、ずぶぬれだね」とドードー鳥は言います。

「かけっこをして、乾かそうよ！」

「それはいい考えだね」とオウムが言います。

アリスと動物たちは、かけっこをして乾かします。

かけっこの後、「このかけっこに勝つのは誰だろう？」とアヒルは尋ねます。

「みんな勝つんだよ、だからみんな賞品がもらえるんだ」と、ドードー鳥が言います。

「それで、アリスがその賞品をくれるんだって」

「でも、賞品なんて私、持っていないわ」と、アリスは思います。

アリスは、どうしたらいいのかわかりません。

アリスが自分のポケットに手を入れると、お菓子箱を一箱見つけます。

「ここに、みんなのためのお菓子がいくらかあるよ」とアリスは言います。

アリスはそれぞれの動物に、一個ずつお菓子をあげます。

「アリスも賞品をもらっているはずだよ」と、ネズミが言います。

「もちろんさ」とドードー鳥が言います。

「アリス、君は賞品に何をもらったんだい？」

「私、この箱しか持っていないの」とアリスは言って、空っぽのお菓子箱をドードー鳥にあげます。

「いいね！」とドードー鳥は言います。

「ここに君の賞品があるよ、アリス。美しい箱さ」

「何て不思議なの！」とアリスは思います。

アリスはドードー鳥を見て、「ありがとう」と言います。

動物たちは立ち去って、アリスだけになります。

何か音が聞こえて、白ウサギが見えます。

「公爵夫人さま！」と白ウサギは言います。

「公爵夫人さまがお怒りになる。僕の手袋はどこだ？」

アリスは辺りを見回します。

すると突然、何もかもが違う様子になって、アリスは田園地帯にいます。

白ウサギはアリスを見て、「メアリー・アン、ここで何をしているんだ？ 家まで急いで行って、私に白い手袋を持って来ておくれ！」と言います。

「白ウサギは、私を召使いだと思っているのね」とアリスは思います。

アリスは白ウサギの家に走って行って、白ウサギの手袋を手に取ります。

すると、テーブルの上に一本の瓶が見えて、「私がここで何かを食べたり飲んだりするたびに、面白いことが起こるんだわ」と思います。

アリスがその瓶を飲むと、大きくなり始めます。

今や、アリスはととても大きくて、ウサギの家の窓から、片方の手を外に出します。

「メアリー・アン！ お前はどこにいるんだい？」と白ウサギは尋ねます。

「僕の手袋はどこ？」

白ウサギは、自分の家のドアを開けようとしています。

しかし、アリスの腕がドアにつかえているので、開けられません。

白ウサギは庭師を呼びます。

「パット！ パットや！ どこにいるんだい？」

「私はここにいますよ、ご主人さま」とパットが言います。

白ウサギの家の近くには他の動物たちもいて、動物たちは白ウサギを助けたがっています。

「こっちへ来て、僕を助けておくれ」と、白ウサギは怒りながら言います。

「パット、窓の中にあるあれは一体何だい？」

「あれは手です」とパットは言います。

「手だと！」と白ウサギは言います。

「お前は何を言っているんだ？ よくお聞き。僕たちは家を燃やさなくちゃいけない！」

「何ですって！」とアリスは叫びます。

動物たちは少しの間、静かになります。

それから、動物たちは窓の中へと石をいくつか投げ入れます。

石は小さなケーキになります。

アリスはいくつかのケーキを食べて、小さくなります。

アリスはうれしくなって、家から走って出ます。

動物たちはアリスを捕まえようとしますが、アリスは森の中へと逃げます。

アリスは、森で大きなキノコを見ます。

キノコのとっぺんには、眠そうなイモムシがいます。

イモムシは、長いパイプをふかしています。

「お前は誰だい？」と、イモムシは静かに尋ねます。

「わ…分からないわ」とアリスは言います。

「私の大きさはね、しょっちゅう変わるの。今はとても小さいのよ」

「俺には分からないな」と、青いイモムシは言います。

「私には説明できないわ」とアリスは言います。

「イモムシさん、私に例を挙げさせてね。ある日、あなたはチョウチョウになるでしょう。

それって不思議じゃないかしら？」

「いいや、そんなのちっとも不思議じゃないね」とイモムシは言います。

「で、お前は誰なんだい？」

「まず、私はあなたが誰なのか教えてほしいわ」とアリスは言います。

「どうして？」とイモムシは尋ねます。

アリスは、その質問に答えることができません。

アリスは怒って、歩いて立ち去ります。

「戻っておいでよ！」とイモムシは言います。

「俺は君に話したいことがあるんだ」

アリスはイモムシのところに戻って、イモムシを見ます。

「絶対に怒ったりしちゃいけないよ」とイモムシは言います。

「言いたいことはそれだけ？」と、アリスは怒りながら尋ねます。

「いいや」とイモムシは言います。イモムシはパイプをふかして、そしてキノコから降り

ます。

「このキノコの片側を食べれば大きくなるし、反対側を食べれば小さくなるよ」

アリスはそのキノコを見て、「キノコのどちら側を食べたらいいのかしら？」と考えます。

アリスは両側からかけらを取り、最初にとった方のかけらを食べます。

すると突然、アリスはとても小さくなります。

アリスが反対側のかけらを食べると、アリスの首が長く伸びます。

そして、また反対側のかけらを食べると、ちょうどいい大きさになります。  
これでアリスは満足です。